

取組実績の概要 【2ページ以内】

本事業は、一橋大学大学院国際企業戦略研究科（ICS）と北京大学光華管理学院（PKU）及びソウル大学経営学部・経営専門大学院（SNU）による、日中韓における経済界のビジネスリーダーを育成するための、単位認定や成績管理に関して高い質保証を伴った協働教育プログラムである。

ダブルディグリー・プログラムは、派遣先で他の在籍学生と同様の基準により成績評価され、派遣元のシステムに沿って単位互換を行う。ICSでは派遣先で取得した単位を、講義時間を基準にICSの単位数に換算し“DDMP(Double Degree MBA Program)”という科目として一括で単位認定を行っている。学位授与にあたっては各校で取り交わした覚書に授与要件が明記されており、当該要件に則って学位が授与される。

学期間交換留学プログラムは、派遣先で履修した科目の成績に基づき派遣元で単位認定を行う。ICSでは2年目のセミナー単位として認定しており、履修した科目とその内容について報告書を作成し、セミナー・アドバイザーに提出するシステムをとることにより、派遣先における学習内容の充実度を確認している。

短期集中プログラムは、3大学所在都市を順に訪問し、教員または企業のリーダーによる講義や現地視察により滞在国のビジネスや社会等を学ぶ。開催都市の担当教員が1名乃至複数名プログラムに同行することにより学生の参加状況や活動について把握する他、3都市を回った最終日のプレゼンテーションも評価の対象となる。単位認定の方法については、各派遣元の規則に基づく。

人材育成という視点では、中・長期に派遣先に滞在し、派遣先学生と共に学ぶダブルディグリー・プログラムや学期間交換留学プログラムの参加学生は、文化・慣習も含めた違いを実感して、更に複眼的な視点が養われる。加えて、派遣元で得た経験や知識をもとに派遣先で議論や意見交換を行うという経験を通して、これまで学んだ内容や自分自身の強み・弱み等を客観的に捉えることができ、将来、世界で活躍する際の多様性・柔軟性を醸成するために必要な要素を身に付けることができる。また、短期集中プログラムにおいては、3校混合チームを構成し、一つのテーマについて議論を重ねながら、講義や企業訪問を通じて各国におけるビジネスの実態を学ぶことができるため、将来、多様なバックグラウンドを持つチームのメンバーとして活躍する素地を作ることができる。

ダブルディグリー・プログラムにおいては、平成24年度にPKUと平成25年度にSNUとそれぞれ覚書を取り交わし、各プログラムの参加要件及び学位取得要件について、明確な基準を示している。毎年各校が各プログラムの内容や要件を作成し、参加学生は応募前に確認することができる。学期間交換留学プログラムについても“Fact Sheet”というその年のプログラムスケジュールや授業内容、派遣の際に必要なVisaに関する記述等必要な項目を定め、各校学生が閲覧できるようにしている。短期集中プログラムについては、事前に3校の担当教員がチームで取り組むプロジェクトのテーマを議論し、学生募集を行う際には派遣元において、その内容及び成績評価の方法が告知されている。3校の教職員は英語が堪能なため、派遣学生の相談に対し細やかに**サポートできる体制が整備**されている他、各校ディレクター乃至コーディネーターが日常的に派遣学生とコミュニケーションをとり、派遣先元両校の調整が必要な案件にも柔軟に対応している。**専門科目はすべて英語**で行われるため、異なるバックグラウンドを持ちながら対等に議論や授業参加可能であり、グローバルで活躍する人材育成に大きく寄与する内容となっている。短期集中プログラムは、現地や世界で活躍する企業の訪問や、ビジネスリーダーとのセッションを提供する等、充実した教育内容であり、毎年参加学生から大変好評である。**教員の資質向上**について、3校いずれも英語でプログラム運営をしているため、語学上の要件は満たしている。ICSは更なる質の向上のため、1年間に1～2名の教員をHarvard Business Schoolに派遣し、教授方法に関する研修を受講するシステムを実施している。

受入・派遣いずれも、提携校のディレクター乃至コーディネーター間で日常的に円滑なコミュニケーションをとることにより、連絡や情報共有体制は整備されている。ICSは、ダブルディグリー・プログラム及び学期間交換留学プログラムの参加学生に対し、在籍学生と同等にビザ取得や住居手配、所属するゼミのセミナー・アドバイザーによる履修指導、キャリアサービスによる就職支援、英語のカウンセリング等、一般的なサポートを行っている。なお、ICSでは全て英語でプログラムを運営しているため、原則資料の翻訳は必要ない。派遣学生に対しては、所属するゼミのセミナー・アドバイザーが事前及び派遣中の履修指導等をきめ細やかに行うと共に、キャリアサービスオフィスの案内や相談も利用可能な体制となっている。

毎年のプログラムスケジュールや授業内容は、各校作成のFact SheetやApplication package/guide lineに明記されているため、参加学生は事前に内容を把握した上で、応募が可能である。プログラム参加学生は派遣元に戻った後も、ソーシャルネットワーク等を通じた派遣先との繋がりを保つ等、より強いネット

ワークを構築する支援を行っている。緊急時及び災害時の対応について、所属ゼミを単位とした安否確認体制を敷いており、毎学期ごとに安否確認方法再確認のための予行訓練を行う等、万全を期している。キャリアサービスは、ダブルディグリー・プログラム及び学期間交換留学プログラムいずれの参加者も利用可能であるため、企業による就職説明会等にも参加できる。また、プログラムの特性上、産業界から招いた多数の外部講師による講義も多く、参加学生に対して十分な機会確保が行われている。

他大学の参加について、受入学生支援の一環として提供している「日本語」の授業は、学期間交換留学プログラム参加学生を含む全学生が履修可能となっている。さらに、年1回3校合同で開催するBESTシンポジウムにも参加が可能である。また、提携校間における本事業の意義や取組の方向性の共有について、定期的に開催する運営委員会から日常的な担当者間のコミュニケーションに至るまで徹底されている。達成状況や評価についても、短期集中プログラムの終了時に3校共同で学生アンケートを行い、運営委員会等で必要な改善点及びその手法について議論し改善している。

情報公開や成果の普及については、BEST Allianceのweb siteの立ち上げやロゴマークの作成などに加え、BESTシンポジウムでは一般に向けて共同研究の成果や学生交流プログラム等について発信した。またシンポジウムへのメディア招致等、積極的なアプローチを行った結果、本事業の認知度も高まり、ビジネス誌や新聞等において、ICSのグローバル化に向けた取り組みが高く評価されるに至った。

留意事項として、本事業審査結果時に開発されるカリキュラムの特色を明確にすること、中間評価時に日本人学生の参加増が挙げられた。前者については、①提携校の在学学生等と同一のプロジェクトや講義に取り組むことにより、将来グローバルに活躍する際に想定される、多様なバックグラウンドを有するメンバーとの協働作業を経験できること、②実際に各都市を訪問することにより、ビジネスにおける文化・慣習の違いを実感し実際のビジネスで活かせること、③日中韓の3国にまたがる広いネットワークを構築できること等を明確にした。また、後者については、オープンキャンパスの開催や国内企業に対する企業派遣の働きかけに加え、東京駅における広告掲載及びメディアアプローチによるビジネス誌・新聞等においてICSのグローバルな取組に関する記事掲載といった広報活動が奏功し、平成27年度の短期集中プログラムには6名の日本人が参加する等の成果を上げている。

本事業における学生の交流は、各校の強みや魅力、改善すべき点を認識する契機となり、より国際的に魅力ある大学となるための原動力として大きく寄与しただけでなく、上述のような経験を踏まえて、本事業外の海外提携校との交流や新たなカリキュラム開発を行うことができた。さらに、本事業の各種プログラムによる経験をもとに、ICSの他の海外提携校との短期集中プログラムやダブルディグリー・プログラム、プロジェクトワークを取り入れた新規科目の開設など**大学の国際化に大きく寄与**した。具体的には、米国Yale大学主導で立ち上がった“Global Network for Advanced Management (GNAM)”という世界のビジネス・スクールが参加するネットワークに、日本ではICSのみが加盟校として認可され、積極的に様々な活動に参加している。GNAMは、加盟校による1週間の短期集中プログラムを加盟校間の学生交流プログラム“Global Network Week (GNW)”として開催しており、ICSは例年募集人数を超える応募がある人気の高いプログラムとなっている。本事業において“Doing Business in Asia”として短期集中プログラムを開催してきた経験が活かされ、より充実したプログラム提供が可能になった大きな成果である。

【本事業における交流学生数の計画と実績】

	平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
計画※	1人	1人	16人	26人	16人	26人	16人	26人	16人	26人	65人	105人
実績	1人	0人	14人	20人	12人	21人	13人	18人	11人	57人	51人	116人

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。